九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

民國以來中國新文學

日加田，誠

https://doi.org/10.15017/2557059

出版情報：文學研究. 14, pp.69-85, 1935-12-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

民國以來中國新文學

目加田誠

白話運動

中國新文學は民國に入つて、白話（口語）の使用が提唱されて後、急激に發展したものである。大體清朝末期から、海外の文藝が林紓（琴南）等の手に依つて盛に飜譯され、創作には又蘇曼殊等の人々が從來の狹邪小說、黑幕小說から離れたものを書いたが、然しそれは皆文語體によつたもので、特に林紓は清朝桐城派の古文家として數へられ、其の有名な巴黎茶花女遺事（即ち椿姫）其他百數十種の飜譯は、何れも嚴密な逐語譯では無く、彼自らは外國語を解せず、人に口譯させて、之を聞きながら、古文の筆を以て自由に綴り上げたものである。宣統二年に創刊され、後に中國新文藝の本陣となつた小說月報の如きも、始は矢張り所謂才子佳人鴛鴦蝴蝶派の小說が主で、林紓は此の雜誌に於て、當時最も活躍したものであつた。

民國五年（一九一六）、當時陳獨秀の主宰してゐた雜誌新青年（民國四年創刊）に胡適の米國から寄せた一文が動機となつて、中國文壇は一時に火の着いた如く、白話運動が燃え上つたのである。だが白話即ち口語の使用は、夫迄と雖、決して無かつた譯では無い。通俗小說、戲曲の對白、等は云ふ迄もなく、語錄類は白話であり、又遡れば論語其他の古典にも當時の白話は用ひられてゐる譯である。それが次第に硬化して了つたので、今、一

切の文章に自由な現代の口語を用ひると云ふ事は、已に其の機運に向つて居乍ら、尙此の運動に口火を切る者を待つて居たのである。從來卑められてゐた白話を提唱すると云ふ事は、同時に從來輕視されてゐた小說戲曲等の地位を、文藝として高く評價し、現代に生きた文藝を產み出す運動になつた。胡適は當時米國留學生であつた。其の通信文は新青年第二卷第二號（民國五年十月）揭載された。此に胡適は故國の文學の革命の爲めに左の八條を提起した。一、典故を用ひぬこと。二、陳腐な語を用ひぬこと。三、對偶を講ぜぬこと。四、俗字俗語を避けぬこと。五、文法の結構を講求す可きこと。六、無病の呻吟をなさぬこと。七、古人の語を摹倣せず、語に自己ある可きこと。八、言に物あること。恐らく胡適と雖、之がやがてあの洪水の樣な文學革命運動の魁とならうとは思はなかつたらう。胡適は更に同誌第二卷第五號（六年一月）に、今度は「文學改良芻議」と題して、前の通信を更に敷衍した論文を投じた。即ち先に「言之有物」と云つた事に就いて、陳獨秀の疑問もあつたので、物とは情感、及思想である。徒に聲調文句の美しさを追ひ、何ら高遠なる思想も、眞摯なる情感も無い當時の文人の弊を救ふを急とするを論じ、又「無病の呻吟」とは、從來の支那文學に此の種の僞りが非常に多いので、健全たる可き青年にして、文を作れば好んで「寒灰」「無生」「死灰」等々の別號を用ひ、詩を作れば落日に對して暮年を思ひ、秋風に對して零落を思ふ、かゝる風氣を一掃せんことを云つたので、其他前揭の八條に就いて一々詳論した。之に完全に共鳴した陳獨秀は、續いて第六號に「文學革命論」を發表したのである。此に彼は文學革命の三大主義として、一、彫琢的、阿諛的な貴族文學を推倒し、平易な抒情的な國民文學を建設せよ。二、陳腐な舖張的な古典文學を推倒し、新鮮な、正直な寫實文學を建設せよ。三、迂晦艱澀な山林文學を推倒し、明瞭な通

俗的な社會文學を建設せよと叫んだ。續いて第三卷第三號（六年五月）には胡適が又、「歷史的文學觀念論」を發表し、一時代には一時代の文學がある、後の時代は前の時代に承前啓後の關係があるにしても、完全に之を摹倣鈔襲するものは眞の文學とは云ひ得ない。死文學を廢して、眞に生きた文學を創る可きである。古來永く後世に傳つた文學は多く當時の白話を用ひたものである。今日の文學は當に白話文學を以て正宗とす可しと論じた。

かくして胡適は自ら白話の詩を作り、嘗試集と題して出版した。やがて彼が北京に歸つて後、白話運動は愈盛に、北京大學を中心とする人々が其の主なる主張者であり、又新青年の讀者は全國的に此の運動を支持した。尤も一部には之に對して、文學を墮落させるものとして非難し、罵倒した人が有つたことは云ふ迄も無い。先に海外文藝の紹介者で、當時守舊派の人々から反對された林紓は、今度は自ら舊守派の人となつて、此の新進の運動に正面から論難攻擊したのであつた。而も已に大勢の向ふ所、如何とも爲し得ず、却つて冷笑を受けて、一たまりも無く葬り去られたのである。

但し從來文學革命に關する諸論は何れも文語體で書かれてゐた。之が遂に新青年第四卷第一號（一九一八）に至つて彼等は其の主張に依つて、完全なる白話を用ひて文學を作り、胡適は「建設的文學革命論」に國語の文學文學の國語と稱へて、死文字は決して活文字を生み出さない、中國に若し活文學を希望するならば、須く白話を用ひ、國語の文學を做す可しと論じ、此の一文が二年に亙る文學革命論の結論となつたのである。然し乍ら雜誌新青年はいはゞ新文化運動の啓蒙雜誌であつて、かく文學改革を稱ふるものゝ、之を實現する作家は乏しかつた。僅かに魯迅（周樹人）を拉し來つて幾篇の短篇小說を書かせた位のものである。

魯迅は一八八一年紹興に生れ、日本に留學し、仙臺の

醫學校に醫を修め、中途に感ずる所あつて、醫を捨て、文藝に志した。仙臺から東京に出て、同志を求め雜誌の刊行を思ひ立つたが失敗し、歸國後杭州の師範學校、又紹興の中學に教職を持つたが、何れも學校當事者と合はず、匆々に辭し、革命黨員となつて働いてゐたが、一九一一年、辛亥革命が起り、孫文が大總統となり、教育部長の蔡元培に招かれて南京政府に入り、やがて政府と共に北京に移り、北京大學其他に講義してゐた。（魯迅著吶喊自序、及增田氏魯迅傳等參照）前に云つた如く、新青年に文學革命を稱へた人々は、自身其の主張に基いて、白話の新文藝を世に示す可き人々では無かつたのである。此の時第一次に魯迅が發表したのは小說狂人日記であつた。もとより幼稚なものであつたけれども、然し彼が此の中に現はさんとしたものは、封建社會の積弊に對する憤慨であり、舊禮教に對する呪詛であつた。此の一篇の影響は大きかつた。久しく暗黑の中に在つたものが、驟かに眼を射る太陽の光を見た樣に（沈雁冰讀吶喊）感じたのである。其後も創作を發表したが、然し新文藝の追隨者は當時まだ〳〵少なかつたのである。

五四運動、その後

然るに其翌年北京に於て勃發した五四運動（一九一九年五月四日）は時の外交問題即ち西原借款及山東問題に依つて、學生間に捲き起された政治運動であつたが、之が全國的に擴がり、帝國主義、北京軍閥に對する反抗であると共に、凡て封建社會道德因襲の破壞、舊禮教への反抗となり、實に之が新文化の欲求、新文化建設の運動となつたのである。因襲的な結婚制度を破壞し、自由なる戀愛へ、いはゞ「個人の發見」、解放の運動であつて新らしきものへの欲求は遂に一時「新らしきもの凡て好し」の思潮とまでなつたのである。此の時に當つて、文學革命運動も、此の潮に乘つて、一時に全國的に湧き上

つた。白話の新聞が全國に四百餘種出現したと云ふのも此の直後である。新文藝は急激に躍進發達し、作家も多數現れたが、何しろ此の後約七八年の間に、日本で云へば明治より大正に跨る約四五十年の文壇の諸潮流が一時に雜然と入り込んで、遂に一層尖端にまで進まうとしたのであるから、形式的には進んでも、內容に於ては兎角幼稚で、所謂眼高手底の觀が有るのは免れない。其の中で兎に角一輝輝いてゐるのは、前に一寸述べた魯迅である。魯迅の創作は上述の狂人日記以後、一九二五年の「離婚」まで、吶喊、彷徨の二小說集に順次に收められて居る。其後は彼は左翼運動との關係から小說は書かなくなつた。彼の小說で最も有名なのは一九二一年の阿Q正傳である。ロマンローランが推賞したとか云ふのも此の小說で、之には日本語譯其他各國語の譯がある。之は彼の故鄉の田舍の無智なる一農民を主人公として、辛亥革命が此の田舍をも洗ひ、而もその革命なるものは、全く歪められたものとなつて、如何に土豪劣紳と妥協し、そして農民等の側を素通りして行つたかを、正しく批判して、之に對する憤激を、鋭い皮肉と悲しいユーモアを以て描き出した。此の一篇は彼の作風を知る尤も代表的なものである。彼の書くものは凡て因襲に對する反抗、無智への憐憫、爲政者の僞瞞に對する憤慨を、いつもユーモアに富んだ筆で描く。彼は正義の人である。一人となつても正義を守り通さうとする氣慨の士である。今も彼を左翼作家と見做すのは當らない。彼は國民政府の僞瞞に對して絕えず反抗するのである。であるから國民政府から常に危險視されてゐる。彼は一九二六年、段祺瑞政府の逮捕令を逃れて厦門に來た。先之、孫文は共產黨と結合し、二十四年には國民黨第一回全國大會を開催し二十五年に孫文死後、廣東に國民政府が成立し、二十六年蔣介石は北伐軍を率ひて北上した。此の時が革命最も華かな時である。此の年厦門大學に來た魯迅は學生の熱

狂的な歡迎を受けたが、却つて一部の讒謗により、之を去つて、更に招かれて廣東の中山大學に文學部長として、彼を愛する數十人の學生を連れて廣東に向つた。廣東は革命軍の根源の地であり、共產黨崇拜の折柄、魯迅は彼が正直に否定したに係らず、革命の闘士、共產主義の戰士たる冠を戴かされて了つた。而も、三ヶ月の後には國民黨の清黨運動が起り、蔣介石は共產黨分子を一網打盡に捕へた。廣東の魯迅にも、其の人々が勝手に與へた冠の故に、危險が迫つた。そしてむしろ政府に奬勵されて共產黨に入つてゐた正直な彼の學生達は捕へられ殺された。魯迅の政府に對する憤りは愈々强烈なるものになつて行くのである。

五四運動の後新文藝が全國に起つた事は上に述べたが民國十一年（一九二二）頃より、新文藝の定期刊行物が全國に簇出した。この後二三年の間に、北京に曦社の爝火、淺草社の淺草季刊、文藝旬刊、星々文學社の文學週報、莽原社の週刊其他、天津の綠波社の旬刊及詩壇、及各學校の刊行物、南京の玫瑰社の心潮、其他、上海には云ふ迄もなく、湖南、浙江、廣東、四川、雲南、河南、湖北、等に、百種を數へる刊行物が出現したのである。さうして先にも云つた如く、あらゆる主義主張が雜然と入り來り、無數の作家が輩出した中に、最も大きな勢力を持ち、且つ、最も著しく對立し合つたのは北京の文學研究會と、上海の創造社であつた。一般に文學研究會は寫實主義を採り、人生派と稱され、創造社は浪漫主義を奉じ藝術派と稱された。然し素よりそれらの主義は決してさう判然としたものでなく、文學研究會の人々にも藝術派的なものもあり、創造社にも又寫實主義的な傾向の濃い人があるのは云ふ迄も無い。

文學研究會

五四運動の翌年即ち民國九年（一九二〇）十一月、文

學研究會なるものが北京に成立した。同人は周作人（魯迅の弟）朱希祖、耿濟之、鄭振鐸、瞿世英、王統照、沈雁冰、蔣百里、葉紹鈞、郭紹虞、孫伏園、許地山等があつた。之は本來五四運動によつて刺激された文藝家の團體とでも云ふ可きであつて、別に一つの文藝上の主義を立てゝ之に集つたものでは無い。此の一派が人生派と呼ばれたにしても、それは後に述べる創造社に對しての言葉で、別に彼らが此の旗の下に集つたのでは無かつた。たゞ研究會の發起宣言に左の三ケ條がある。

第一、感情の聯絡、中國の文人は由來互に輕蔑し合ふ風が強く、但だ新舊兩派の間のみで無く、新文學を提唱する人々の中にも又將來分裂を來す事が多からう事を恐れ、此の會を發起して、一同時々聚會して意見を交換し、互の理解を計り、一つの文學中心の團體を結成すること。

第二、智識の增進、文學研究の相互補助を目的とし、やがて公共の圖書館、研究室、出版部を設け、國民文學の進歩を助成すること。

第三、著作工會の基礎を立てること。文學が遊戯又は消閑の弄び物であつた時代は已に過ぎた。文學は人生に切要なる一種の仕事である。文學に從事するものは、之を以て一生の事業と爲す可きである。故に我等は本會を發起し、たゞ普通の文學會と爲すのみならず、又著作同業の聯合の基本とし、文藝工作の發達と鞏固を謀ることを希望する。

此の第三はやがて彼等が人生派と稱せられるものを含んでゐる。文藝を人生に有意義なるものとしやうとする此の主張は、矢張り五四運動によつて起された新文化運動の一つの現れである。此の會は本部を北京に置いた。そして從來の小說月報を改革し之をその機關雜誌としたのである。其他上海、廣州等皆文學研究會の分會を設けた。

鄭振鐸は小說月報の主編となつた。だが此の人は小說家として擧げる事は出來ぬ。彼は文學研究家である。文學大綱や中國文學史の著があり、曾つて小說月報の第十七卷の特輯號として彼が編輯した「中國文學研究」は當時學生だつた私は非常な刺戟と喜びを以て讀んだものである。此の中に鄭振鐸は文學研究の新方法として、進化の觀念を以て文學を見る事、古來外國文學の影響を考へる事、新材料の發見、その材料による歸納的の考察、そして中國文學の整理を主張した。今となつては何も新らしい考へでも無いが、彼等の當時の意氣込みは盛なものであつた。そして彼は中國文學研究家として、例へば燉煌發堀の資料等を用ひて文學史を書き、燕京大學に教鞭を執つた。（現在は辭した筈）

周作人は魯迅と兄弟であるが、魯迅の鋭い、人を許さぬ一途な生き方と異り、理智を溫雅な風貌に包み、聰明を常に笑容で蔽ひ、其の一黨に取り卷かれて、現に北京文壇の大御所と云つた形で、北京大學の日本文學の教授としてよりも、隨筆家、評論家として知られてゐる。此の人の事に就いては後に再び述べる。

此の文學研究會の中で小說家として最も成功したのは沈雁冰（筆名茅盾）である。彼も一時小說月報の主編となり、一九二六年（北伐軍當時）武漢にあつて政治部の仕事に關係したが、間も無く上海に戻つて、幻滅、動搖、追求の三部作を續いて發表した。之は中產階級の、革命に對する幻滅、其後の動搖、を描かんとしたものである。一體彼のものは時代を描寫することを特に努力して居るらしく、虹といふ小說も、田舍から出た一女性を主人公とし彼女が五四運動に目覺め、因襲的な結婚を脫れ、其後都會の生活に苦鬪して、やがて一九二五年の五卅事件に際遇し、遂に民衆運動に參加する。つまり五四の個人の發見より、五卅の階級の覺醒まで伸びてゆく若い女性の心

理を描かうとしたものである。「牯嶺より東京へ」の一文は當時盛だつたプロ文學作家陣から猛烈な非難を受けたが、結局彼は、現代に於ける小資產階級の苦悶の代表者といふ立場を採つた。宿莽と題する短篇集は其後の、二九年卅年の作を集めたもので、又雜誌現代に農村文學的なものを發表し、其他中篇小說（路等）も可成りあるが、特に長篇の子夜といふ小說は非常に評判を得た。之は些か冗漫な嫌ひがあると思ふが。凡て彼の作には中國青年の思想の惱みが可成り現はされてゐる樣に思ふ。

冰心は女流作家として最も有名で、此の人のものは隨筆、書簡、日記風のものが多く、優しく純に愛に滿ちて女流の中では一番好意が持てる。葉紹鈞は敎育界を素材としたものを常に書き、老舍は一種のユーモリストとして特色を持つ。

これらの人々は「小說月報」停刊後、先頃は「現代」に多く發表してゐたが、其後は又「文學」等に現れた。けれども元々此の文學研究會といふものは先にも述べた如く、初めからいはゞ文學者のグループと云ふに過ぎなかつたので、其後人々の事情の變化と共に何時となく其の正體は、有るが如く無きが如く、解散したのでなくてぼやけてしまつたのである。

創造社

大正七年（支那に於ける五四運動の前年）の夏頃の事であつた。この箱崎の海岸の、石燈籠の下で、互に興奮して語つてゐる二人の中國醫學生があつた。それが郭沫若と張資平であつた。郭沫若は其の年六高を卒業して、九大の醫科に進み岡山から福岡に來たばかりであつた。

「時は八月の末で、學校はまだ講義が始つてゐなかつた。或日の午頃、私は早く午飯をすませて、午後になると起り易い倦怠と睡氣を逃れやうとして、下宿を出て松原の中へ散步に行かうとしてゐた。恰度箱崎神社

の參道まで來ると、思ひがけず海岸からやつて來る張資平に出遇つた。」（郭沫若、創造十年）

張資平は其の時五高に籍を置いてゐた。彼等は一高特別豫科の同學で、其後三年五に遇ふ折が無かつたのである。箱崎の海に浴し、松の根元に腰を下して、涼しい風に吹かれ乍ら、談は自ら彼らの故國の文化に向つた。

「私は前からさう思つてゐるんだが、誰か同志を求めて一つ純粹な文學雜誌をやつて見度い。同人雜誌の形式で、文藝專門にして文語でなく、白話を使つて。—」

「だが、文學雜誌はいゝが、其の同人を何處から求める」

「僕の知つてる處では、豫科の同級だつた郁達夫といふ男がある」

「さうだ、郁は詩が出來る。いつも舊詩を神州日報に出してゐる。それに小說も作つてるさうだ」

「うん、先づ彼は一人に數へられる。それからもう一人、岡山の同窓で、成仿吾がゐる。去年東大の造兵科にはいつたが、多分今年國に返るだらう。彼は非常に文學趣味もあるし、英語がとてもうまい。彼も一人に加へられるだらう」（仝創造十年）

かうして數へ上げて見て結局彼ら郭沫若、張資平の兩人の外に郁達夫、成仿吾の二人を擧げ得たのみであつたが

「此の箱崎海岸の談話は、私自身にとつては、非常に深い印象を殘した。實際私が資平と親しくなつたのは其の時が始めであつたし、又彼が文學上の趣味を持つたのも此の時が始めであつたと思ふ。だから私は創造社の事を想ふと、私自身にとつては、どうしても此の時の談話を創造社の受胎期とせねばならぬやうに思ふ。」（仝上）

さうして此の四人がやがて創造社の中心になつたのである。だが此の時は要するに「受胎期」で、彼等の計畫は仲々急には實現しなかつた。そして其の間に彼らは各々

別々に活動を始めた。郭沫若は盛に新らしい詩を作つて故國の時事新報の學燈に發表した。張資平は「學藝」に小說を、郁達夫も上海の新聞に、成仿吾も又獨り詩や小說を書いてゐた。一九二一（已に五四運動を經て、北京に文學研究會の成立あつて後）愈々機熟して、郭沫若、成仿吾は上海に回り、奔走の結果、泰東書局から純文藝雜誌を發刊することになり、郭は再び日本に返つて、京都に鄭伯奇、穆木天、張鳳擧を訪ね、更に東京に行つて郁達夫、田漢等と會見した。創造社の名は此の時東京で決定された。やがて夏になつて、郭、鄭、郁は上海に回り、郭沫若は詩集女神を、郁達夫は小說集沉淪を、創造社叢書として泰東書局から出版した。彼らの雜誌創造季刊は郭が日本に返つて後、郁達夫が編輯に當つて、翌一九二二年五月出版された。

之が創造社出現の經緯である。やがて之が北京を根據とする文學研究會と相對立して、中國新文學の活動の最も勢力ある機關となつた。注意す可きは創造社の人々は凡て日本留學生であつた。彼らは文學研究會が人生派——人生の爲めの藝術を稱へ寫實派と稱されたに對し、藝術至上主義、天才主義、浪漫主義と目された。之に就いては一概にさう評し得ないものも有るが、兎に角創造社の人々の情熱といふものは素晴らしいものであつた。新らしいものを產み出さうとする彼ら青年の努力は如何なる困難にも屈しなかつた。けれども、かうした新文學に對する燃ゆる情熱によつて結ばれた彼等も、やがて其の人々の性格、傾向の自然の相違が、いつか次第に彼ら相互の隔りを生じ、去る者は去り、殘る者に更に新なるものが加つて、遂に一九二五年五卅事件と共に創造社が左翼に轉換して革命文學の旗幟を揭げ、極端なる言論が現れるに至つて、一九二七年創造社なるものは遂に閉鎖されたのである。けれども創造社が中國新文學に貢獻した功績と云ふものは特筆大書せねばならぬ。此の間、始

終あらゆる困難と戰ひ、惡戰苦鬪しつゞけたのは郭沫若であつた。

郭沫若は本來詩人として知られた。彼の小說は決して上手ではない。多く古人に題材を取り、封建思想に對する反逆を扱つたものであるが、何れも概念的なものになり過ぎた。然るに其の自叙傳的なものは、彼の眞劍な實生活のその儘の描寫であるが故に、讀者の心を强く打たずにをかない。飄流三部曲（岐路、煉獄、十字架）は全く血の出る樣な生活の記錄である。「橄欖」の行路難などもそれである。彼は或時は家族を連れて上海に移り住み、或時は又福岡に來り住んで、經濟的、精神的の壓迫苦悶は實に言語に絕した。而も終始一貫、强烈な、執拗な、反抗精神を失はなかつた。やがて創造社が革命文學を稱へる時、彼は一時武漢政府に入り、實際の工作に從事したが、武漢政府の分裂後、日本に亡命した。彼の「創造十年」は、創造社の歷史であり、同時に又中國新文學運動の歷史であり、當時の時代相を窺ふに足るものである。「中國古代社會研究」は唯物史觀的な立場から支那古代の社會を見やうとしたものであるが、之は學術上色々な誤謬を指摘されたが、之を楔機として、やがて彼は金石文の研究に向ひ、爾後、兩周金文辭大系、金文叢考、卜辭通纂、兩周金文辭大系圖錄、及同攷釋、其他續々と著述してゐる。現在日本に住んで、この金文の研究以外に、飜譯等をやつてゐる。（詩集女神、塔、橄欖、落葉、我的幼年、反正前後、創造十年、飜譯にはヱルテルの悲しみ、フアウスト等）。

郁達夫は東大經濟學部に學び、前記の如く創造社に加はり、上海に返つて創作に耽つた。二十三年北京に來て北大に文學を講じ、二五年には武昌の大學に、次いで廣州の大學に聘せられたが、間もなく又上海に戻つた。彼の出世作は日本で書いた沈淪である。八高の學生だつた頃の、彼ら留學生の精神的肉體的の惱みを扱つたもので

ある。郁達夫は郭沫若と違つて非常に弱い性格で、たえず愛を求め、愛に飢えてゐる。其の弱さは時に頽廢的なものに向ふ。故に人は彼を指して或は頽廢派の稱號を與へる。沈淪の一篇が已に其の代表的なものとされるのである。然し、彼は實は僞惡者であり、本當に頽廢的な生活に陷るには餘りに聰明でありすぎた。そして其の聰明の故に又團體的な行動には加はり得ず、時代の空氣を人一倍鋭く感じ强く受けながら、ある弱さと聰明さの爲めに個人主義的となり、いつも自棄と得意の織り交つた氣分に終始する。「過去」の一篇は一とき華やかにそして憂鬱な人生を描いて、彼の小說家としての手法の最も圓熟したものと思ふ。私の好きなのは采石磯といふ、淸朝の詩人黃仲則を主人公としたもので、黃仲則の實に鋭い、感じ易い、弱い一面ひどく負け嫌ひな性格を巧みに描いてゐる。此の詩人が洪稚存と共に朱竹垞の幕下に在つて日を送つてゐる折柄、都から來た當時考證學者の譽高い戴東原がやつて來て、この詩人の詩を「華にして害ならず」と評し、彼らを冷視するに對して、黃仲則の打ち摧かれた心に壓へ切れぬ憤りと、此の「大學者」に對する輕蔑、それは實は當時上海に來た胡適に對する郁達夫達の鬱憤を畫いたものである。創造社閉鎖の後、彼は杭州に移り、今は杭州の東南日報の主筆となり、本來旅行好きの彼は各所に旅して、山水遊記の類ばかり書いてゐる。弱い身體に强い酒、山水と詩、彼自身何と云つてもやはり段々支那文人的なものが濃くなつて來てゐるらしい。

張資平は通俗作家として多量の小說を書く。創造季刊第一期には「彼女は祖國の天野にあこがれる」を發表し其後、梅嶺の春、約伯の淚等は彼としていゝものであるが次第に通俗小說家らしくなつて來て、其の扱ふ題材は常に多角戀愛、變態戀愛で、小說の技巧は、恐らく誰よりもうまいけれども、餘り高く評價は出來ぬ。けれども青年の間にその影響の大きい事も亦第一であるかも知れぬ。

成仿吾は批評家であり、其他陶晶孫、何畏、徐祖正等がこの同人に居た。徐祖正は北京大學で日本文學を敎へてゐたが今は外遊中とか。かうして創造社は創造季刊、同週報、創造日、等を刊行し、又後に洪水月刊、創造月刊等を出した。之がやがて上海の五卅事件以後、左翼運動全盛期となり、創造社も革命文學を主張し、一時さういふ連中の陣營となつたが、清黨運動につゞいて、遂に一九二七年に閉鎖された。

其後の變遷

清黨運動の直前は全く小兒病的な左翼運動が猛烈で、文學はプロ文學が全盛、又作家達は多く實際政治工作に身を入れたが、清黨運動後、逃れるものは逃れ、轉向するものは轉向して、その餘の左翼の連中は、廣東から歸つた魯迅を盟首として、一九三〇年左翼作家聯盟を作つた。翌年、この連中の多くが捕へられ殺され、其後やがて滿洲事件、上海事變を楔機として、抗日文學とも云ふ可きものが簇出し、小說に戲曲に、何れも民族主義文學が起つて來た。文學雜誌も現代が無くなり、文學、文學季刊（鄭振鐸主宰）位のものであり、作家として現に活躍してゐるのは茅盾（沈雁冰）、沈從文等である。他にも勿論作家は多いがまだ特に目立つ程の成績を上げてゐるのは無い樣に思はれる。

小品文の流行其他

然るにこゝに注意す可き現象は、一般に文人的、復古的な傾向が現れて來たことで、其の現れの一つは、北平の周作人を中心とする小品文の一派である。即ち周作人、林語堂、俞平伯、聞一多、鍾敬文、豐子愷、廢名、達であり、小品文雜誌としては人間世、論語等が最も廣く讀まれてゐるが、其他雨後の筍の如く、何々半月刊なるものが現れた。周作人は元來隨筆家として、「雨天の書」、「談龍集」其他隨筆評論集が數多あつたが、彼が明末公安派の袁中郎の文章を推賞してから、袁中郎研究と

云ふものが猛烈に流行して、袁中郎の文集、其他明清の小品文集が幾種も出版され、この派の人々が公安派の文學を宗として、小品文を提唱したのである。袁中郎一派のあの輕いユーモアと鋭い感受性を持つた「垢拔けのした」筆致が好まれると同時に、其の內心の不平を、輕い諷刺に現して、雨を聽きつゝ茶でも啜らうとする態度が喜ばれるのであらうか。之で見ても時代と文學の關係は仲々後世になつては簡單に解釋出來ないものがあると思ふ。（周作人には知堂文集、澤瀉集、苦雨齋序跋文、周作人散文集、俞平伯には燕知草、雜拌兒等、林語堂には大荒集、我的話等、朱自淸には背影等あり。）

白話運動起つて約二十年、白話文は最早一般通用の文となり了つたが、そこに自ら口語と云つても、文章の口語と云ふものが完成されて來て、充分品も格もある白話文を書く人が多くなつた。俞平伯の書く白話文等は實に凝つたもので、難解の評を自らも認めてゐる程である。こゝに一方に再び文語體を提唱しやうとする一派が現れ又一方には、更に大衆的な、方言を用ふる大衆語なるものを主張する一派とが現れた。然し恐らく之はどちらも左程力强い潮流とはなり得まい。最近刊行されてゐる制言といふ雜誌がある。之は蘇州の章太炎を中心として、國學の論文を集めたもので、相當評判もいゝ。新聞によると章太炎は今年國學講習會といふものを設け、吳承仕錢玄同、其他この系統の人が名を連ねてゐる。かう云ふ所にも又一つの傾向を認められないだらうか。

戲曲

尙中國新劇の方面について一言すれば、實演の方では民國初年頃日本の新派の影響を受けて、春柳社といふものがあつて、文明戲と稱ふるものをやつて居たが永續きせず、續いて文學革命の運動に際し、劉復（半農、昨年死）等が戲劇の改良を稱へ、胡適は文學進化觀念と戲劇の改

良といふ一文を書いた。胡適がイブセン劇を紹介推賞したことは後の中國新劇發展に與へた影響が大きい。民國十年沈雁冰、鄭振鐸、歐陽予倩、汪沖賢、熊佛西等の人々が民衆戲劇社を創めた。實行、研究二部に分ち、上海の中華書局から「戲劇」を刊行し、理論、飜譯、創作劇を掲載した。同年上海では汪沖賢が「華倫夫人之職業」を演出したが之は大失敗に了り、十一年には蒲伯英が北平に人藝戲劇專門學校を創める等、次第に新劇の運動は試みられたが、實際戲曲らしい戲曲を飜譯で無く作り出したのは創造社の田漢であつた。創造季刊に、「珈琲店之一夜」、「午飯之前」を發表し何れも好評を得たが、やがて彼は獨立して南國月刊を刊行した。「獲虎之夜」は當時最も傑作と稱された。之は長沙邊りの鄉村の獵師の生活を扱ひ、因襲的功利的な結婚制度の悲劇を描いたものである。郭沫岩も卓文君其他の戲曲を書いたが、先にも云つた樣に、餘りに概念的で、戲曲としては全く感心出來ない。其他戲曲作家には葉紹鈞、洪深、陳大悲等があり、上述の各時代の潮流に從つて各樣の戲曲が現れた。田漢と共に忘る可からざるは歐陽予倩であつて、彼は戲曲を書き、又自ら出演した。「回家之後」等の作があり新劇に理解ある青年俳優として、一時日本の文士間に騷がれたものであつた。熊佛西は戲曲作家であると共に、新劇指導者として今に活躍してゐる。私は北京で二度ばかり新劇を見た。屠戸と云つて農村問題を扱つたもの、及委曲求全といふ教育界の事を材料にとつたもので、何れも青年士女の看客が滿員であつた。屠戸は北平劇學會の公演で、熊佛西の自作演出であつた。

通俗小說

現在中國では作家達が著書を出版して、如何に好評だつたと云つても、版を重ねるやうな事は滅多にない。從つて小說を書いて食べて行く事は、相當一流になつても

甚だ苦痛らしい。雜誌も發行部數が少なく、讀者は極めて限られてゐる。只之が新聞に出る通俗小說となると、讀者の範圍はずつと擴まり、滿都の士女を熱狂さすといふ風になる。二三年前、北平で非常に流行したのは張恨水の啼笑因緣で、私が一昨年北平に行つた頃、試みに現在誰の小說が最も讀まれてゐるかと聞いた處、男も女も學生も語學の敎師も、口を揃へて擧げたのは此の小說である。之は北平の一大學生を主人公に、摩登小姐(モダンガール)あり、太鼓(タークー)語り(太鼓を打つて唄ふ藝人)の女あり、軍人あり實業家あり、或は北京飯店(ホテル)の跳舞(ダンス)、或は鼓樓下の貧民窟或は東城の富豪の邸宅、北海の五龍亭、天橋の見せ物、西山の別莊、什刹海、先農壇と、まるで北平案內の樣に北平の名所を舞臺にして、話の筋は紅樓夢と兒女英雄傳を眞似した樣な、馬鹿らしいと云へば誠に馬鹿らしいものであつたが、その代り不思議に支那氣分の濃いものである。之が映畫にも芝居にもなつて、一時は啼笑因緣迷(ブーム)とも云ふ可き連中があつたが、かう云ふものが實際之程流行する事はやはり考慮に入れねばなるまい。作者張恨水は今は北平の私立の美術學校の校長になつてゐるとか。其他之に類似した大衆小說も有るが、之程一般に歡迎もされず、又面白いものもない樣である。この小說は二集三集と後を追つて、遂には古北口邊りの長城線の戰爭にまで話の筋を運んで大當りを取つたものである。

以上略述した民國以來中國新文藝の運動に、實際活躍した人々の重なるものには、支那滯在中に會つて實際話を聞くことが出來たが、元々この新文學は自分の研究目的でも無く、且つ主として北平に居た爲め、上海を中心とする、現代活躍しつゝある作家連とは殆ど相知る機會は無かつた。從つてこの一文の中に當然紹介せねばならぬ人々が洩れてゐると思ふが、之等は又次の機會に讓る。